追弔会追悼談で語られた校祖友國晴子
―教職員、教え子らの友國への思い―

深　澤　茂　俊

Tomokuni Haruko, Founder of SHINWA about whom some memorial stories were told at the memorial service

－ The thoughts of teachers and students toward Tomokuni －

Shigetoshi FUKASAWA

要　旨

親和女学校 校祖 友國晴子（以下、友國）は1925（大正14）年10月26日に逝去した。２代目校長の和田豊が提案した追弔会、追悼談が３年後に開催され、追弔会は現在まで続いている。追悼談では、教職員や教え子らが中心となって友國との思い出を語っている。校祖資料室から追悼談の内容が収録、保存されたカセットテープがみつかった。

本論文はカセットテープからデータに起こしたものを紹介しながら、追悼談で語った３人の教え子と教職員の友國への思いを手がかりに人となりを分析する。併せて、教え子と教職員が語る友國の人物像などを考察する。

キーワード：親和学園　校祖友國晴子　追弔会　追悼談

Ⅰ．序

友國は1925（大正14）年10月26日に逝去した。２代目校長の和田　豊の提案から友國が亡くなった３年後に「校祖記念日」とし、追弔会、その後に追悼談が開催されている。この追弔会は現在も続いている行事であるが、追悼談は行われていない。

追悼談は、友國とかかわりのあった教え子や教職員が友國の遺徳を偲び、友國との思い出を語る場[1]となっていた。親和学園汲温会編『年輪』によれば「昭和初年より校祖祭で先生の思い出を語って頂くのが恒例となって続いている[2]」と記されている。また、校祖資料室の調査をすると、追悼談の内容が収録されたカセットテープが記録[3]として残され保存されていたことがわかった。

筆者は校祖友國晴子研究に着手して３年目になる。この間、友國の偉業を明らかにするために友國周辺の人物研究に着手し、まず、友國の教え子で養女として薫習（くんじゅう）を受け育てられた綿谷禮利（わたやれいり）の看護の原点を探っ

[1] 友國の思い出話をする追悼談は、卒業生や教職員にとって友國を尊敬し、慕ってきたことからも友國亡き後の卒業生の居場所として、友国との思い出話を語る場であったことがわかる。

[2] 親和学園汲温会編（1987）『年輪　親和学園汲温会　百年のあしあと』親和学園汲温会、44頁。

[3] 「校祖資料室」に保存のカセットテープは1959（昭和34）年から1989（平成元）年まで30年間の追悼談が14本保存されていた。将来に追悼談の資料を残すためにMP３形式に変換して、デジタルデータとしてDVDに保存することにした。

た[4]。次に、『汲温會誌』など記念号の投稿文を手がかりとして、友國の教え子たちが感じ取った友國像[5]を明らかにしてきた。さらに、親和女学校で友國から教育を受けた。その後、明治後期に医学を学び、1913（大正２）年に医術開業試験に合格し、1914（大正３）年に医籍登録、実地研究後に帰郷して1914（大正３）年10月に開業した。板井種乃（いたいたねの）の人物像を探るとともに友國との関係性を明らかにした[6]。

本論文では、追悼談の内容が収録されたカセットテープの記録をもとにテープ起こしをしたデータを紹介しながら、追悼談で語った３人の教え子と教職員の友國への思いを手がかりに人となりを分析する。併せて、教え子と教職員が語る友國の人物像などを考察する。

Ⅱ．校祖 友國晴子の追弔会の経緯と追悼談

親和学園では、友國が亡くなった10月26日を校祖記念日としている。毎年、校祖の御霊を迎え、友國の教えと遺徳を偲び、併せて、その年に物故された親和学園の関係者の冥福を祈るために追弔会を執り行っ

写真１：親和学園の追弔会で学園理事長が祭文を読み上げる（2017年10月26日）

ている。追弔会が始まったのは友國が逝去されて３年後に始まった親和学園の伝統的な行事である。

綿谷によれば「涙のうちに一周忌もすぎ、三回忌も済んで其の翌年であった。前校長和田先生によつて、新しい學校に校祖記念日が制定せられた。即ち我が親和の存續する限り年々十月二十六日の命日を以て校祖記念日とし、大祭祝日に準じて儀式を行ひ、一は以て故先生の偉業と遺徳とを景仰する機會を興へ、一

[4]深澤茂俊（2017）「綿谷禮利の看護の原点を探る　－親和学園 校祖 友國晴子との出会いから－」神戸親和女子大学福祉臨床学科紀要 第14号 43－55頁。

[5]深澤茂俊（2017）「教え子がみた校祖友國晴子先生の姿　－『汲温會誌』の記念号などを通して－」親和学園創立130周年記念史編集委員会編『親和学園創立130周年記念誌「校祖 友國晴子」特集』88－97頁。

[6]深澤茂俊（2018）「女医板井種乃と校祖友國晴子との関係」親和学園教育研究所編『親和学園教育研究所研究紀要（創刊号）』投稿中。

を以て先生をして永遠に生ける親和の本尊たらしめたいとの有難き御心によつてゞある。[7]」と述べている。

追弔会で歌われる「校祖記念日の歌」の歌詞は友國の生き方と人柄を表出されたものである。この唱歌は親和高等女学校２代目校長和田　豊[8]の作詞によるものである。校祖の生き方と人となり、さらには時代背景や全体像が表現されており、友國の生きざまを直接知り心から尊敬している人にしか書けない歌詞であるといえる。以下にその歌詞を紹介する。

一、明治のなかばまだ人の　　目ざめぬ時に魁(さきが)けて
　　時勢の進歩を達観し　　女子教育の礎(いしずえ)を
　　早くもおきし人は誰　　嗟乎女丈夫先見の人。

二、教へ子僅(わず)か唯二人(ただふたり)　　そを創業の門出にて
　　幾十年の行路難(こうろなん)　　踏みやぶり来て今日の
　　親和を築きし人は誰　　嗟乎(ああ)女丈夫意思の人。

三、温和親切同情の　　美質を天に稟(う)けたまひ
　　慈愛の権化(ごんげ)と三千の　　教への子等に仰(あお)がれて
　　世にましまし人は誰　　嗟乎(ああ)女丈夫情の人。

上記の歌詞の中に「先見の人」「意思の人」「情の人」とあるが、まさに友國の全体像を表すキーワードであることは間違いないものと思われる。まず、「先見の人」は、明治の中頃にすでに女子教育の必要性を具体化し女学校を設立した点にある。山根は「当時にあって、女性の社会進出及び社会貢献を奨励する校祖の考え方は、先見の明であり、つねに親和の発展を支える理念でした。[9]」と述べている。

次の「意思の人」は、不屈な意思で仕事をした人であった点にある。山根は「校祖は度重なる困難を持ち前の強靭な意志と卓越した行動力で乗り越え親和を発展させていきました。教育上、財政上、そして管理上の多くの困難な課題を克服し、安定した学校運営の仕組みを構築し、親和発展の基盤を築きました。[10]」と述べている。

そして「情の人」は、教え子や教職員に対して思いの深い人であった点にある。山根は「職員を、校長として、同僚として、心を込めて支え、職員が教育に専心できる環境を整えました。そして教職員との温かい人間関係を大切にする[11]　－中略－」と述べている。

追弔会のはじまりは上記の通りであるが、追弔会の後に行っていた追悼談の始まりは、昭和２年であり、

---

[7] 綿谷禮利（1937）『校祖友國先生』親和学園、159～161頁。深澤が「校祖記念日の歌」の歌詞にルビを付けた。

[8] 兵庫縣御影師範学校同窓義會編集（1936）『兵庫縣御影師範学校創立六十周年記念誌』兵庫縣御影師範学校同窓義會の冒頭写真の項には、兵庫縣御影師範学校第24代目和田 豊校長の顔写真が掲載、和田の教え子から人柄等も紹介されている。和田は1921（大正10）年３月に御影師範学校を退職し、同年４月に親和高等女学校の校長として赴任している。

[9] 山根耕平（2017）「校祖友國晴子の生涯　～挑戦と創造～」親和学園創立130周年記念誌編集委員会編『親和学園創立130周年記念誌「校祖 友國晴子」特集』82頁。

[10] 同上。

[11] 同上。

終わった時期は「汲温会誌[12]」によれば、2004（平成16）年10月26日の追悼談が最後になっている。追悼談は、友國の教え子らが中心となって、友國との思い出を語ったものであった。つまり、時代が移り友國と直接かかわりのあった教え子らや当時の教職員が亡くなってしまったことで追悼談を開催できなくなったことが背景にあると思われる。

Ⅲ．追悼談で語られた教職員と教え子の友國像

１）田和寛一郎教諭の友國とのかかわり

まず、1960（昭和35）年10月26日の元教諭田和寛一郎（以下、田和とする）氏が語った追悼談の内容を以下に紹介する。ところで、写真２の田和は国語の教員であり、作詞を手掛けており、田和が作詞した歌「校祖追悼の歌」と「追弔会の歌」の２曲は現在も和田元校長が作詞した「校祖記念日の歌」とともに追弔会で歌われている。

写真２：若き日の田和寛一郎教諭

私は、今から４年前になると思います、昭和31年にここに立ちまして、皆さんにお話を申し上げたのであります。皆さんには友國先生を思い起こすことはできませんが、想像をしていただけたように思います。そして友國先生が「先見の人」であったということを申し上げたのであります。また、若き日の友國先生のご様子を、いろいろ広くから申し上げて、友國先生が「意思の人」であったということを申し上げたつもりであります。なおこの学校に、83歳で死ぬまで、ちょうどそれは友國先生が学校をお始めになった頃から、ずっと友國先生に忠実に仕えました、小使い[13]のおとらばあさんを例にしまして、友國先生が「情の人」であったということを申し上げたつもりであります。

私は大正10年の３月に学校を出ますと、すぐに友國先生に雇われたのであります。私のこの学校にまいった大正10年は、第一次大戦ののちの好況時代でありまして、学校の先生になり手が少ない、どこでも就職しようと思えばよりどりであるというような世の中でありました。その頃、私は学生時代から、神戸の親和という女学校の校長は、女で髭を生やしていると、そういうことを聞いておりました。これは、あとから知ったんでありますが、先生にお目にかかったことのない人は、みんなそう信じておったほど、全国的に有名なことであったそうであります。私もそれを聞きまして、女で髭を生やす、これはちょっと面白い校長だぞと、こう思ったそのことが、あるいはこの学校へ就職する、ひとつのきっかけであったんじゃなかろうかと、しか思い出せませんのです。さて、来てみますと、友國先生にお目にかかりますと、口髭なんかありませんで、そういえば鼻の下に、何か産毛にしてはちょっと濃いような、そういう毛があったように思います。これは友國先生が、顔剃りのような、そういうお化粧をなさらないことからでした。

私が就職しました頃には、本校の財団にいろいろの事柄が起こりまして、いろいろ事情がありまして、友國先生は校長の職を退かれまして、理事長におなりになりました。生徒からは校主先生と呼ぶことになったんであります。そうして校長には、その時の御影師範学校長でありました和田　豊先生が、校長としてお見えになりました。これは今日、その和田先生のお嬢さんがここへ見えているんだと。お嬢さんと言う

---

[12]親和学園汲温会編『汲温会誌』2005（平成17）年９月１日号の６面の「追弔会」の項、当時、追悼談は97歳の高島康氏が話されたもので、友國は朝「皆さん起きなはれやー」「まだかな起きなはれやー」と言って歩く姿が思い出されることが話されたと書かれている。また、2017（平成29）年11月30日の親和学園理事古家清子氏の話では、間違いなく、2004（平成16）年10月26日の追悼談が最後であると話している。

[13]「小使い」という言葉は差別用語となっている。カセットテープに録音されていたので表記をそのまま活用する。

と若いようですが、もう皆さんのお母様のようなお方であります。この和田先生は、大変偉い人であります。当時、校長室には、校主先生と校長先生とが、仲良く机を差し向かいに並べて、毎日いろいろご相談をなさりながら、学校運営にあたっておられました。学校の運営なんてことは、皆様はご存じないかもしれませんけれども、２人が校長室におって学校の運営にあたるなんてことは、よその学校にはありえないことであります。私どもは、和田先生も偉いし友國先生も偉い、みんな職員は感じておったのであります。

私は当時27歳の若輩であり、まだ独身でありました。今こんなことを皆さんに申し上げると、お笑いになるかもしれませんが、その頃は、女学校の先生は独り者ではいけない、これはもっとも男の場合でありますが、独身ではいけないと言われた頃であります。若い私は、今こんな顔を見て、女学生は話がおかしくなりますが、その頃は大変若かったんであります。まあ結婚する相手なんかは、いいのがなんぼでもあるような気がいたしておりました。もっと独り身でおって、のんきに遊んでおりたいというような気もいたしておりました。ところが友國先生は、毎日のように私を校長室へ呼び、卒業生の写真を何枚も出され、「これはどうです？」「これがいかんのやったら、これはどうです？」「もうちょっとこんなのもあります」。仕方がないから私はええ加減なことを言って、ちょっと考えさせてもらいますぐらいで引き下がります。また１日２日経つと、「ちょっと校長室へ来てください。」また行ったら、「あなた、あれどう考えます。そんならこれだったらどうです。」次から次へ、卒業生の写真をお見せになって、おすすめくださいました。先生の卒業生を愛される心、部下の身をいろいろ気にかけてくださる、その心持ちがもったいなく、断りきれなくなりました。

そこへもって、私は田舎生まれの長男でありまして、親父が「早く嫁をもらえ。友國先生のおっしゃる通りにしろ。」やかましく申します。私はツーストライクノーボール、バッターインザホールに追い込まれ、とうとう、今日も連れ添っておりますあの妻はその時もらったんであります。

皆さん、先ほど校祖記念日の歌をお歌いになりましたが、あの歌の通りに、私は今日も、友國先生が「先見の人」であり、「意志の人」であり、「情の人」であるということを申し上げたいのであります。校祖記念日の歌は、あの歌詞は、友國先生の跡を継がれた和田校長先生がお作りになったんであります。文芸作品としては、あるいは上々の作でないかとも思いますけれども、批判があるかもしれませんけれど、友國先生その人を、よく言い表しておられると思います。今日２人は黄泉路とやらで、いや、そんな陰気なところでなしに天国で、在りし日の校長室のごとく、友國先生は温暖に笑みをたたえ、和田先生は40年の後の今日にしても、なおあの歌が生徒によって歌われておることに感じ入って、あなた方の歌をお聞きになったことと思います。

友國先生は、女としての幸福を犠牲にしました。女子教育に一生を捧げられた友國先生について、２代目校長の和田先生は、こう言っておられます。この学校は当然、友國女学校と称すべき学校である。親和と名づけられたのは、先生の謙譲の美徳の表れであり、親愛の情のあふれ出たものであるといい、我ら跡を継ぐものは感激に堪えずと、こう書いておられます。私は今、友國先生の功績を称揚するにあたり、時代も違いますから、皆さんに友國先生を模範として、その通り真似をせよというのではありません。しかしながら、本校の校風は、友國先生の人格の反映であり、本校の校訓、誠実、温和、堅忍不抜、ああこれこそは、友國先生の如くあれというのと、なんの異なるところがありましょうか。この教育精神こそは、本校にとって、何ものにも代えがたき宝物であります。そこにこそ本校永遠の生命があると信ずるのであります。ご清聴を感謝します。

田和は、1956（昭和31）年にも追悼談で友國のことを語っている。しかし、この時のカセットテープは校祖資料室の調査をしたが見つからなかった[14]。「校祖記念日の歌」の中の友國について全体像を「先見の人」「意思の人」「情の人」と語っている。特に、田和の話では「情の人」として語られた校務員[15]のおとらばあさんが83歳で亡くなるまで、友國に忠実に仕えたことにふれている。このことについて、教え子の渡邊が友國の面倒見のよさとして、以下のように述べている。

大へん情深く、長年使つてをられた女の小使さんが、體の自由がきかなくなつてからでも、尚其の面倒を見さうして、其の小使さんが死んだ時にも、學校から葬式を出されたのである。今の世の中でかうした美しい行ひはまれであらう[16]。

友國は親和女学校を立ち上げ、学校運営や経営が厳しい状況の中、多くの苦難を「人に生かされ、人を生かして生きる」という思いで乗り越えてきた。人に対して情深く、誠心誠意人の面倒を見る姿となり、友國の部下（校務員）への看取りのまなざしと行動が教え子にも美しいと感じられた。同時に、教え子はその行為をみて真の教育者であると思ったのであろう。

また田和は友國について「女で髭を生やしている」と聞いていたことを語っているが、実際は、口髭などなく鼻の下にちょっと濃い産毛が生えていたという。つまり、友國は顔剃りといったこともせず、質素な生活をしており、自分のことなど一切かまわず化粧もせず素顔でいたことにもよるのであろう。そして、27歳の独身の身であった田和は友國の薦めにより親和女学校の卒業生を妻にしている。というように、友國はお節介なぐらい面倒見が良いのである。当時の女学校の男性教師は、田和の言うように独身では良くないとする風潮があったのであろう。そんな中、友國はたくさんの卒業生の写真を見せるなど気にかけていたことがわかる。田和は友國の「心持ちがもったいなく、断りきれなくなりました。」と述べている。そして、ご縁を得て卒業生と結婚している。

友國の世話好きについて、親和学園汲温会『年輪』では以下の通り記されている。

校祖のお世話好きは有名であった。卒業生の就職、結婚、家庭の心配事等、親のように慕って一身上の相談をお願いしていた。何事もすべてにお世話が行き届きご人徳の程がうかがえる[17]。

田和は1921（大正10）年４月に親和高等女学校に赴任した。同じ年に御影師範学校校長を退職した和田も２代目校長として赴任している。校長室では、和田校長は理事長になった友國と校長室で向かい合わせの席で学校運営にあたったと述べている。

田和は友國について「女としての幸福を犠牲に女子教育に一生を捧げられた」という。明治の女性として女学校を設立して、学校経営を切り盛りしなければならなかったことを考えれば、間違いなく芯の強い教育者の姿ではなかったかと思えてならない。

２）檀上笑子氏と友國先生とのかかわり

次に、1981（昭和56）年10月26日、親和高等女学校第９回卒業生［1917（大正６）年卒業］檀上笑子（以下、檀上とする）氏が「校祖先生の遺徳を偲ぶ」で語った追悼談の内容を紹介する。

---

[14]カセットテープが主流となった時代は1970年代である。http://compactcassettes.jp/index.html「懐かしのカセットテープ博物館」（2017年11月28日確認）磁気テープで録音されたことは稀であり、カセットテープにより追悼談で語られた記録は、一度磁気テープからカセットテープに変換されたものではないかと推測できる。それは最も古い記録は1959（昭和34）年の追悼談が保存されていた。

[15]カセットテープに録音されていたのは、「小使い」であったが、差別用語なので以下は校務員として表記する。

[16]渡邊千代子（1925）「友国先生」『友國先生叙勲祝賀記念號　汲温會誌　第三號』親和高等女學校汲温會、47頁。

[17]親和学園汲温会編（1987）前掲書、43頁。

先生の思い出話に移りたいと思いますが、先生が一番お好きだったものはね、召し上がるものの中では、枝豆なんです。ちょうどお昼の時間の時に、小使いさんが高台の黒塗りのお膳に、ご飯と枝豆を、どんぶりにいっぱい載せて、持っていらっしゃるんですよね。それで、「ちょっと、ちょっとあんた、先生あれ皆召し上がるんかしらん」って、私もよく言いましたが、その枝豆をしばらくしますと、下のほうにもうひとつどんぶりがございましてね、覗きにいくと空っぽになって、皮が下のほうのどんぶりに入っていました。それが毎日なんです。「あの先生、枝豆ばっかり上がっているわ」というぐらいのことで、お友だち同士ね、いつもそんなこと言っておりましたので、いまだに枝豆を見ますと校主先生を思い出すんです。

それでまあ私が卒業しましてからですが、やっぱり学校になんか用があってまいりましたら、校長室をふっと覗いてみましたら、なんか悲しそうな顔をなさって、やっぱり卒業生の方を前へ置いて、そしてなんか沈んだような話をしてらっしゃるんですよね。それで、「ああ悪い時に来た、こんな時に入ったら悪いな」と思って廊下へ立ったんですけども、入るのを躊躇していましたら、「壇上さん、なんか用かね」っていうようなことで、「いえ、あとで結構です」って言って行きかけたら、「いやいや、別に大したことない、入りなさい」って言われたんで入りましたら、その卒業生の方がね、４年か５年上の方だったと思いますが、お子さん亡くしたらしいんですよね。それで先生のところへ来て、淋しさのあまり先生に、人情の厚い方ですからね、いろんな話をすると、先生はいろんなことをおっしゃってくださるんですよね。それで先生にまあ、それとなしに愚痴と訴えと悲しみをお話してらしたらしいんです。先生も本当にかわいそうだ、本当になんとかしてやりたいというような顔が、もう顔と体にすっかり溢れているんですよね。そして、あんたもう、悲しいやら、かわいそうなことしたなあ。これはもうしょうがないよ、泣きたかったらなんぼでも泣きなさい。泣けるだけ泣いたら、もう自分で得心して、そしてまあまあ仕方がない、この世の中のことが自然にわかるから、泣けるだけ泣きなさいと言ってお話してらっしゃる場面を見ましたので、こっちのほうも涙が出たんですね。

そういうような、もう人の嬉しいっていう時はもう喜んで、嬉しそうに喜んでくださるし、悲しい時にはもう本当に、自分もそれに接したようにして悲しんでくださる、本当に人情が厚い先生です。それで、私はいつもそう思っておりましたが、それについてね、今ふっと気がついたんですがね、学校にね、私ら入学した時分に、その時70歳ぐらいだったと思いますけども、夫婦者の小使いさんがいました。ご存じですかしら、お年召した方はご存じと思いますが、その夫婦者のね、小使いさんがいらっしゃいましてね、それで先生はいつも「小使ーい、小使ーい」と呼んでいらっしゃるんですよね。それ私よく耳に残っているんです。そしてその小使いさんは、もう一生懸命に先生の、学校をお始めになった時からお仕えしていたらしいんですね。それで先生も、いつもあったかい気持ちでお使いになるし、その小使いさんのほうも、あったかい気持ち、先生にはもうどんなことがあっても、自分の身を捧げてお仕えするという気持ちだったんです。それで私もよく覚えていないんですけど、なんか学校の記念日があったらしいんですね。それでいつもの通り学校へまいりましたら、生田の御魂を祀った講堂へ集まって、いつも朝礼がございます。その朝礼の時に、ふっと見たら、お年寄りの夫婦がそこにいるんですよね。あら今日は何事かなと思っていましたら、先生がいろいろなお話になる時に、自分に仕えてくれた小使いですけども、あんた方もよく知っているように、生徒さんのことだったら、多少のことでも犠牲になって働くという気持ちでやってくれる小使いさん、本当によくやってくれたので、学校の記念だったと思いますが、この際に表彰をしたいから、皆さん聞いてくださいって言って、表彰状をおあげになって、なにがしかのものもおあげになって、そしてその労をおねぎらいになりました。

そんなことで、何かにつけて、先生はいろんなことを、教訓をね、ただ本の上だけの教訓でなしに、じかに感じるように教えてくださいましたもんですから、今の教育を受けてらっしゃる方は、そういう教育

はきっとないと思うんですけどもね、もう一度先生がよみがえっていただいて、女子教育にね、力を入れていただいたら、どんなに今の日本の女の子がね、立派になるんじゃないかしらんと、私は思います。

そんなことで、おしまいの話はけったいな話でございますけども、皆さんも卒業なすったら、何年か経つにつれて、古いほど楽しみが大きくなりますので、お友だちだけは大切に逃がさないように、１枚のはがきで通信ができるんですから、はがきをやっとけば、なんとかいって返事が来ますから、どうぞ皆さん仲良くね、汲温会の卒業のかたまりですね、このかたまりから逃げ出さないように、もう外国へ行っても、どこへいらしても、どこで住んでも、毎年総会はありますし、それからこの慰霊祭は、毎年これは連綿として続くと思いますから、皆さん忘れないように、私の年になってもいらしていただけるように、若い方に今からお願いしときますから、どうぞそのおつもりで。くだらない話ばっかりで、とりとめがございませんで、お聞き苦しかったと思いますけども、どうぞそんなことで、今日の話はおしまいにさせていただきます。

檀上は、友國の思い出の一つとして、枝豆のできる季節には枝豆とご飯を昼食で毎日食べていたという。そして、枝豆が好きであることを語っている。また、親和学園汲温会編『年輪』によれば、校祖の好物として以下のように伝えている。

枝豆、おそば、２、３人前（？）はゆうに召し上がったと伝えられている[18]。

檀上は友國が毎日飽きずにどんぶりいっぱいもの枝豆を食べていることを知り、枝豆をみると友國のことを思い出すと語っている。

友國は別にも西瓜が大好きなことでも知られる。このことは友國の部下で教員であった平井は、以下のように述べている。

先生の西瓜好きも久しいもんですが、大きな西瓜一つ、ペロリと一人で召し上がって仕舞ったのに、ピックリした事がありました[19]。

檀上は卒業後も校長室に出向き友國に会うことがあった。その時、卒業生が友國のところに相談に来られていた。話を聞くと、その卒業生は「お子さんを亡くした」とのことであった。友國は人情深く、なんとかしてあげたい気持ちで話を聴いてあげる姿勢だった。「悲しいやら、かわいそうなことしたなあ。これはもうしょうがないよ、泣きたかったらなんぼでも泣きなさい。」と卒業生に接していることからもわかる。また、校務員夫婦（先に田和が取り上げたおとらばあさん）の話であるが、友國が親和女学校を創設した当時から友國に忠実に仕えてきた校務員であり、学校記念日に表彰状と記念品を渡して、学生の前で、その労をねぎらう姿勢を見せている。同時に、そのことは校務員も友國に仕えて良かったと思った。友國が寛大な気持ちと感謝の気持ちを届けているものと思われる。この行為こそ友國が「情の人」と言われる所以でもある。

３）杉本幸子氏と友國先生とのかかわり

そして、1987（昭和62）年10月26日、親和高等女学校第15回卒業生［1923（大正12）年卒業］杉本幸子（以下、杉本とする）が「校祖先生の思い出」を語った追悼談の内容を紹介する。

私は大正８年に入学いたしました。そしてその頃世間では、親和の校長さんは女で偉い人で、たいそう偉い人でお髭があるという世間の評判でございましたので、私どんな方かと思ってね、好奇心持っておりましたんです。そして入学試験の時に、４月１日と２日が入学試験でして、初めは学科試験で、あくる日

[18]親和学園汲温会編（1987）前掲書、43頁。
[19]平井滋子（1927）「友國先生の逸事」『故友國先生追悼　附汲温會誌　第五號』親和高等女学校汲温會、162頁。

に口頭試問がありました。口頭試問ってどんなことかしらんと思って、もう内心ね、こわごわでおりましたんですけれど、お部屋へ入って、校長先生の前へ行ってお辞儀しますと、頭上げるなり、「あんた背高いなあ」言われましてね、はたにおられた女の先生に、「でもこの方、まだ12年６か月ですよ」「ほお、そうかいな」言われまして、それから二三、家のことを聞かれまして終わりましたんですけど、お髭のことなんか確かめることもできませんでした。

それから入学式の、４月８日の桜の花のきれい頃に入学式がおこなわれまして、そしてその式のあとで校長先生が、この学校は４年制ですけれども、５年制の県立に負けないような、劣らないような教育をしますから、どうぞご父兄方ご安心してくださいとおっしゃいましたんで、親も皆喜びまして、私ももう県立に負けてたまるものかいうような気で、一生懸命意気込んで、勉強する決心いたしました。

この頃は入学のあとで対面式とか歓迎演奏とかございますけれども、あの頃はすぐもう、あくる日から皆授業が始まりまして、朝礼が毎朝雨天体操場でございました。そして入り口に入ったとこがもう祭壇です。その前へ生徒は各クラス１列に縦に並んで、そして静粛にしておりました。先生方は壇の両側におられまして、もし遅刻すれば、その先生の前を通らなければなりませんので、遅刻しないようにと思って、一生懸命朝早く行ったもんでございます。そして校長先生が壇の上へ上がられて、そして静かに扉をお開けになりまして、拝礼なさいますと、一斉に私たちも皆、拝礼しました。その時、先生はいつも被布をお召しになっておられましてね、その時のお姿が今でも忘れられません。その拝礼のあとで、校長先生からお話がありまして、それから教頭先生のお話が終わってから、皆静かに教室へ行って、授業が始まりましたんでございます。体操場に祀ってありますのは、生田神社のご祭神、天照大神の和魂で、女の子はやっぱり和やかな気を持たなければいけないいうことから、お祀りになっておられましたんでございます。

その頃の生徒の服装と申しますと、質素と、それから清潔のもとに、着物は木綿の筒袖、白襟、えび茶の袴、それから白足袋、えび茶の鼻緒に下駄を履いていました。風呂敷は白でございました。入ってまもなかったかね、靴を履いてもよろしいということでしたので、皆喜びましてね、それぞれ靴屋さんへ行って買いましたものです。形は決まっていませんでしたけれども、黒靴で、そして紐で結んでもいいし、ボタンをしても、好きな形で皆注文して、喜んで履いたもんです。

ちょうどその年に、長かった世界大戦が終わりまして、神戸市内も全国皆平和で喜んでおりました時で、それで私たち女学生は、ちっちゃな旗を両手に持って旗行列をいたしました。男子は提灯行列で夜に町の中を歩いておりました。大変な賑わいでしたが、その反面、その前の年に米騒動がありまして、神戸市内は大きな鈴木商店が焼き討ちされたり、ほかのお米屋さんも暴徒がおしかけて大変な騒ぎになりまして、姫路から軍隊が来て、やっと鎮めたようなことでございました。それで校長先生も、これはお米の値上がりの為にこんなことなって、やっぱりお米が少ないから節米をしなければならないと言われまして、生徒の親たちを集めて、節米料理の講習をなさいまして、代用食の講習をなさいました。母も行きまして受けてきましたが、たいがいジャガイモを主としたお料理で、それから蒸しパンなどでございました。そして校長先生は、毎日お弁当を持って、各教室を順番に回られまして、そして生徒とお食事をご一緒になさって、その時に「皆、お昼にパン食べている人、手挙げてみなはれ」言われて、手挙げた人はえらく褒めていただいたようなことでした。そして皆、「代用食でパンを食べなければなりませんで」言ってね、そんなお悟しなさいましたことがありました。それから、皆自分で、袴は自分で仕立てないといけませんとおっしゃって、あれは１年生入りましたすぐにもう、袴の仕立て方を習いました。そしてお布団も、仕立ては簡単やから、夏休みには皆家の布団を縫って、お母さんを助けてあげなはれいうことでした。そんなお話もございました。

そして寄宿舎に入っておられた方の話ですけれども、夜になりますと、皆寝静まる頃に、廊下をペタペ

タと、草履をちょっと鳴らして歩かれて、部屋を覗かれて、布団を蹴ってはる人があると、それを直したりして、みんなの顔色を見ておられたそうです。いつかその生徒のひとりがね、黙って出ていって、高砂屋のきんつばを買ってきたそうです。三宮行ってね。そしたらそれは舎監の先生がえらく叱られたんですけども、校長先生「若い女の子やもん、それは欲しいわいな」いうて、そない言うて、おやつが出るようになったという話でございました。

それから大正10年の４月でしたか、和田校長先生をお迎えになって、友國先生が校主となられまして、いつも校長室で、向かい同士に机、向かい合わせで置かれて、そこで２人が陣を取っていらっしゃったお姿も、はっきり覚えております。

私は、卒業しましてしばらくしてから汲温会の幹事になりまして、そして幹事会にたびたび出席させていただきました。そのたびに、先輩の方のなんとまあお偉いことと思いました。それで私も、大変勉強させていただいてよかったと思った次第でございます。校長先生が、主人がもしものことがあった時には、路頭に迷わないように、自立できるだけの心づもりでおらなければなりませんから、そういうふうに言われました。皆一生懸命勉強なさって、明治の終わりから大正の初めにかけての卒業生の中には、小学校の先生になられた方や、それから母校へお勤めになった方、また社会へ出られた方がたくさんおありになったように聞いております。

誠に拙い話でございましたけれども、どうもありがとうございました。これで終わらせていただきます。

杉本は、親和高等女学校の15期生として1919（大正８）年に入学している。入学前に友國が偉い人でお髭があるという世間の評判を知っていた。入学試験の口頭試問（面接）の際に、その事実を知りたいと好奇心で臨んだが、緊張のあまり友國の顔を見ることができなかったという。

友國が校長として父母の前で、県立女学校は５年制、本校は１年少ない４年制ではあるが、県立女学校には負けず劣らずの教育を実践的する旨の話をした。それを聞いた杉本も一生懸命勉強に取り組むことを語っている。

その後、親和高等女学校も修業年限は県立女学校と同様になった。『創立五十年史』によれば、1920（大正９）年７月２日に修業年限が４年を５年に変更になったことが、以下の通り記されている。

本科修業年限ヲ五箇年ニ變更ス[20]。

また、その当時、友國は生田神社の御霊に拝礼をしていた。朝夕の拝礼について『郷土百人の先覚者』によれば、以下の通り記されている。

明治三十三年、校内に産土神（うぶすなかみ）、生田神社（いくた）の神霊をまつり、朝夕職員生徒に拝礼をさせたが、校祖なきあとも長くその拝礼がつづいていった[21]。

拝礼の時の女学生の服装は、着物は木綿の筒袖、白襟、えび茶の袴、白足袋、えび茶の鼻緒に下駄を履いてとのことであった。しかし、黒の靴を履いても良いとのことで、紐で結ぶとかボタンとかで好きな形にして喜んで履いたと語っている。

さらに、1918（大正７）年には米価の値上がりが原因で全国的な民衆暴動の米騒動が起こった。そのあおりを受けて、神戸市内でも焼き打ち事件があり、友國は節米料理の講習会を開催している。米の代用食としてじゃがいもを使った料理や蒸しパンを作って教え子と一緒に食べたということも語っている。

また、友國は学校内で生活していたので、実質的には寄宿舎の舎監も兼務していた。杉本は寄宿舎での生活はしていなかったが、友達から聞いた話であろうが、夜は廊下をペタペタと音を立て歩く特徴があっ

[20]堀川美治編（1937）『創立五十年史』親和高等女學校、62頁。
[21]兵庫県教育委員会編『郷土百人の先覚者』財団法人社会文化協会、444頁。

たという。友國は教え子思いであり、消灯後に布団を蹴って寝ているとなればかけ直してあげるやさしさを持っていたという。さらに、神戸に出て高砂屋のきんつばを買ってきたことで他の舎監に怒られたとの話を聞いた。その話を聞いた友國は教え子の気持ちを受け止めて、「若い女の子やもん、それは欲しいわいな」といって、友國の太っ腹の性格から、その後、寄宿舎でもおやつが出るようになったことを語っている。

それから、明治後期にはまだ女性は自立などとはほど遠く家を守ることが主であった。しかし、友國の実践的な教育のすごさは、すでに女性が自立する生き方について「路頭に迷わないように、自立できるだけの心づもり」で生活することの大切さを教え子の杉本に伝えている点である。

Ⅳ．語り継がれる校祖友國晴子

追弔会は昭和２年に「校祖記念日」とし、毎年10月26日に友國の遺徳を偲び、その年に物故者となられた学園関係者の冥福と供養のために挙行されている。この追弔会は、すでに91年間続いており、これからも学園に欠かせない行事に位置づけられている。

写真３：裁縫の平井滋子教諭[23]

そして、追弔会の後に友國とのかかわりのあった教え子や教職員らによる追悼談は、1927（昭和２）年から2004（平成16）年まで78年間続いてきたものであった。そのことは、友國の教え子らが亡くなってしまい追悼談を開催することができなくなった。

ところで、写真３の平井は裁縫の教員として20年間、友國の側におり友國の人となりを知ることができた。友國先生との思い出を汲温會誌の友國の追悼号[22]に掲載しており、その一部を以下に紹介する。

『平井さん私を海にほり込んでお呉れ、かう暑うては堪らんワイな』と、よく申されました。

友國は、糖尿病の持病があり、肥満体質で太っていたこともあり、夏になると暑い暑いを、言い通す程に暑がり屋であったことを知ることができる。

團扇を持つて、左右からバタバタと煽がが（ママ）れるのが先生の癖でありました。

両手に団扇を持って左右にバタバタ振って扇ぐという癖があったことを伝えている。

澤山な卒業生の中で、たまに先生を訪問して來る人がありますと、非常に喜ばれて、御自身の部屋で、必ず共に會食をせられたものです。卒業生を見る事、丁度眞實の我子の様であるのには、傍で見て居て、毎に涙がこぼれる程です。

友國は、面倒見がいいことから、卒業生を我が子のように思っており、会食をすることも楽しみの一つとしていることがわかる。

先生の廃物利用主義は中々徹底したもので、御自身のお襦袢などは、色々の端裂を繼いで繼ぎ回してあるのです。此を見せられた生徒達は、よく校長先生の東海道の御襦袢と云つたものです。

友國は質素で倹約生活をしており、たくさんの継ぎ接ぎだらけの長襦袢を着ていたことから教え子から「東海道五十三次の襦袢」と陰口を言われるほどであった。

人の惡事は決して口外せぬ方でありました。先生に對して不都合な事を爲た人の事でも、何時も許して

---

[22]平井滋子（1927）「友國先生の逸事」『故友國先生追悼　附汲温會誌　第五號』親和高等女学校汲温會、162頁～163頁。
[23]私立親和高等女学校（1919）『創立参拾周年沿革史』私立親和高等女学校。十年以上勤續職員として写真で紹介されている。

居られた。其太っ腹には、普通の男子はトテモ及ばぬ處だと私は思ひます。

友國は、さっぱりした太っ腹の性格であったという。卒業生に自分のボーナスの一部を送金していたが、一切口外せずにしており、後日、家計簿でそのことがわかったとのことである[24]。

平井は裁縫の教師として友國の側にいて友國の癖や性格などの一部始終を知っていたのであろう。そのことを記録として残していたことが、友國の功績を語り継いでいくための基礎資料となる。こうした資料を後世に伝えるべく先駆者教育が必要に思えてならない。そのことを親和中学校・親和女子高等学校では、中学１年生の「道徳」の授業の中で、学校の歴史についての話などを通して友國のことを語り継いでいる。向田は「校祖先生が親和女学校を建学された思いと本校の校訓の精神をしっかり自覚してもらいたい[25]」と述べている。

友國から直接の教えでなくても、教え子らの残した記録を通して歴史を振り返り、親和学園の原点である校祖友國晴子の人物像をわかりやすく伝えることが大切である。そのためには、上記のようなエピソードなども交えながら永遠に語り継いで行かなければならない。

Ⅴ．結び

本論では、第１に友國が逝去し３年後に２代目校長の和田の提案により追弔会と追悼談が行われるようになった。追弔会は現在もこれからも続いていくが、友國から直接教えを受けた教職員や教え子らによる追悼談は2004（平成16）年を最後に終わっていることがわかった。第２に追悼談については、校祖資料室の調査により、14本のカセットテープで残され保管されているものが見つかった。そのすべてを将来に残すためにデジタルデータ（MP３形式）に変換し、文書データにするためにテープ起こしをした。今回、そのうち３事例を紹介し分析した。その結果、友國の人物像として浮かび上がってきたことは、①友國の全体像は「先見の人」「意思の人」「情の人」である。②その中でも「情の人」は、友國の面倒見のいい性格を裏打づけるものである。事例として、女学校の再興時から校務員とした仕えた夫婦である。その校務員の仕事に感謝し、教え子の前で表彰している。そして、友國は病気で倒れ83歳で亡くなったおとらばあさんを看病し、看取り、葬式を出している。③友國の好物である枝豆の話しや西瓜の話を通して、友國の人間性あふれる姿がわかった。④寄宿舎生がきんつばを買いに行き、舎監に怒られた際に「若い女の子やもん、それは欲しいわいな」といって、その後、寄宿舎でもおやつが出るようになった友國の太っ腹の性格であることがわかった。⑤明治後期は、まだ女性は家にいて家を守ることが当たり前の時代背景の中、友國は女性も自立しなければならないことを「路頭に迷わないように、自立できるだけの心づもり」として教え子らに向き合い伝えている。第３に友國のことを語り継いでいくためには、教え子らの記録を通して歴史を振り返り、親和学園の原点である校祖友國晴子の人物像をわかりやすく伝えることが大切である。エピソードなども交えながら永遠に語り継いで行かなければならない。また、語り継ぐために親和中学校・親和女子高等学校の取り組みのように中学１年生の「道徳」の授業の中で友國のことを語り継がれていくことが重要な鍵になると思われる。

最後になったが、追悼談として語られたことは友國の人物像を知るためにも大切な基礎データである。

---

[24]前嶋雅光「親和学園校祖　友国晴子　伝記 稿」神戸親和女子大学『研究論叢』第29号、176頁。

[25]向田　茂「向田校長が中１の「道徳」の授業をおこないました。」『親和中学校・親和女子高等学校ホームページ』の以下のアドレスにてhttp://www.kobe-shinwa.ed.jp/news/schoollife/2016/09/28_114135.html（2017年11月28日確認）なお、学校法人親和学園創立130周年を記念して漫画『親和学園校祖 友國晴子物語』（2017年）を親和中学校・高等学校「漫画研究部」の生徒達が製作している。「親和中学校・高等学校のホームページ」http://www.kobe-shinwa.ed.jp/130th/book/（2018年1月22日確認）に各種データ形式で登録されており読むことができる。

追悼談で語った3人の教え子と教職員の友國への思いを手がかりに人となりを分析することにより、教え子と教職員が語る友國の人物像などが明らかになった。

参考文献

・私立親和高等女学校（1919）『創立参拾周年沿革史』私立親和高等女学校。
・財団法人親和高等女学校（1932）『校舎落成記念　昭和七年十月』財団法人親和高等女学校。
・堀川美治編（1937）『創立五十年史』親和高等女学校。
・親和学園創立七十年史編集委員会編（1957）『七十年史』親和学園。
・親和学園創立八十年史編集委員会編（1967）『親和学園八十年史』親和学園。
・親和学園汲温会100周年記念誌委員会編（1987）『年輪　親和学園汲温会100年周年記念誌』親和学園汲温会。
・親和学園創立100周年記念事業委員会編（1987）『親和学園100年のあゆみ「世紀」』親和学園。
・神戸親和女子大学三十年史編集委員会（1996）『神戸親和女子大学三十年史』神戸親和女子大学。
・親和学園創立120周年記念事業委員会編（2007）『親和学園創立120年記念誌』親和学園。
・神戸親和女子大学創立50周年記念誌編集委員会編（2016）『神戸親和女子大学創立50周年記念誌2016』神戸親和女子大学。
・親和学園創立130周年記念史編集委員会編（2017）『親和学園創立130周年記念誌「校祖　友國晴子」特集』親和学園。